

八尾市文化財調査報告 5 6  
平成 18 年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

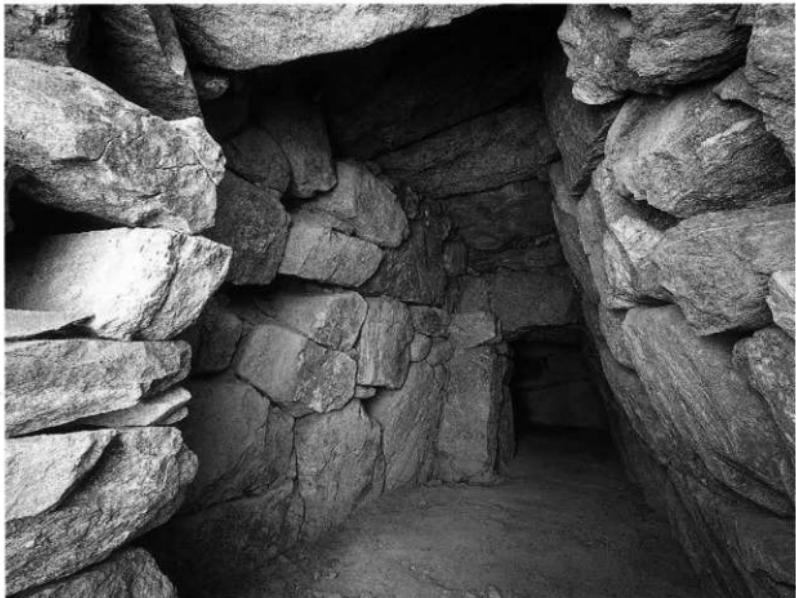
## 高安古墳群 分布・測量調査報告書

大窪・山畠南地区詳細分布調査  
市史跡・二室塚古墳測量等調査 他

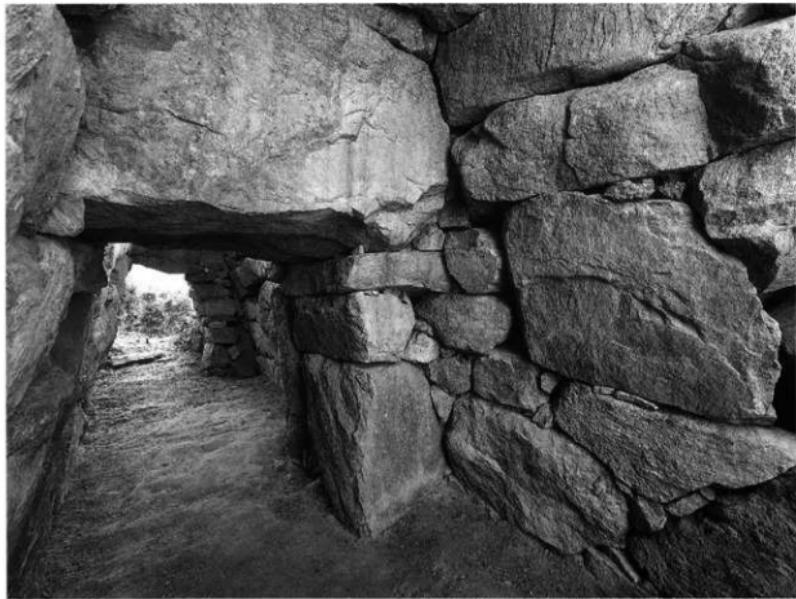
2007年3月  
八尾市教育委員会

八尾市文化財報告56正誤表

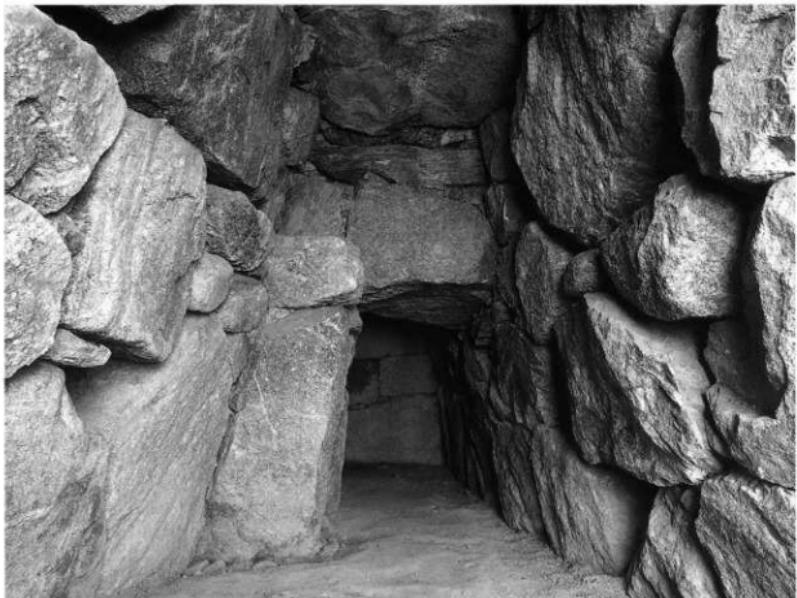
頁	行	誤	正
例言	25	松屋信一が	松江信一が
例言	27	松屋信一が	松江信一が
22	35	(1819)に	(1891)に



二室塚古墳石室 羽道から石室内部（撮影 阿南辰秀氏）



二室塚古墳石室 後室から開口方向（撮影 阿南辰秀氏）



二室塚古墳石室 前室から後室 (撮影 阿南辰秀氏)



ロマイン・ヒッチコックが1887～88年頃撮影した二室塚古墳石室 (ロマイン・ヒッチコック1891「日本の古墳」より転載)



二室塚古墳墳丘 南東より (撮影 河南慶秀氏)



二室塚古墳・服部川127号墳 航空写真 (撮影 (株)相互技術)

## はじめに

八尾市の東側を画する生駒山麓には、高安古墳群をはじめとして、300基近くの古墳が残されております。古代の豪族の墓域として、まさに、古墳の宝庫ともいえる地域であります。八尾市教育委員会では、平成15年度から、これら、高安古墳群をはじめとする山麓の貴重な文化財である古墳について、広く市民に親しんでいただける場となるよう、保存調査を進めてまいりました。平成16年・17年度は、大森貝塚を発見した米国人の博物学者、エドワード・S・モースが調査した高安古墳群内の開山塚古墳と周辺4基の古墳を、市指定史跡といたしました。

本年度は、「日本考古学の父」といわれる英国人ウイリアム・ガウランドが、明治時代に、「双室ドルメン」として、海外に紹介した服部川の二室塚古墳の調査を行い、平成18年度の市指定史跡といたしました。また、高安古墳群の大窪・山畑南地区の詳細分布調査が、本年度で終了しました。本書は、これらの調査の成果をとりまとめたものです。

また、昨年度より「高安古墳群と山麓の古墳保存・調査計画検討会議」を設置し、専門の先生方や行政担当者の方々に、今後の保存計画等について、貴重なご意見を賜りながら、事業を進めているところであります。

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

八尾市教育委員会

教育長 森 卓

## 例　　言

1. 本書は、八尾市教育委員会が、国庫補助事業（重要遺跡確認・保存目的）で行った高安古墳群の大窪・山畑南地区における詳細分布調査及び服部川に所在する二室塚古墳の墳丘測量調査他の報告である。
2. 調査は、八尾市教育委員会文化財課（課長 岸本邦雄）が主体となって行った。
3. 二室塚古墳の調査にあたっては、古墳の所有者の方々及び周辺の服部川地区の方々に多大なご協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。
4. 二室塚古墳の調査にあたっては、野洲市教育委員会の花田勝広氏が作成された実測図面を、報告書等で使用させていただいた。また、本報告中の表2の古墳一覧表及び平成17年度報告の表3の服部川地区古墳一覧表における石室の計測値は、石室が一部しか残存していないものについて、氏の実測図の計測値を使用させていただいた。貴重な資料を、高安古墳群の保存調査のために、ご提供いただきましたことに、厚くお礼申し上げます。
5. 卷頭写真2下のロマイン・ヒッチコック撮影の二室塚古墳石室の写真については、上田宏範氏のご所蔵されている原書から使用させていただいた。氏からは、高安古墳群の学史をはじめとして、平素より、多くのご指導をいただいている。記して厚くお礼申し上げます。
6. 詳細分布調査にあたっては、古墳の存在する私有地の立ち入り等について、大窪・山畑地区の方々にご協力をいただいた。また、調査中の駐車場の使用等、大窪の浄土宗来迎寺にご協力いただいた。厚くお礼申し上げます。
7. 調査及び調査計画にあたりましては、「高安古墳群と山畑の古墳保存調査計画検討会議」の白石太一郎氏、増瀬徹氏、高橋照彦氏、一瀬和夫氏、花田勝広氏、安村俊史氏、岩松博忠氏、森屋直樹氏、土屋みづほ氏にご指導をいただいた。また、二室塚古墳の調査と指定について、八尾市文化財保護審議会委員の井藤徹氏のご指導をいただいた。さらに、二室塚古墳の複室構造について、河内長野市教育委員会の太田宏明氏に、ご教示をいただいた。記して、厚くお礼申し上げます。
8. 詳細分布調査の現地調査にあたっては、調査補助員として、大西進、松尾信一が参加した。遺物の実測及びトレースは、調査補助員、藤中貴子が行った。台帳整理や古墳一覧表等の内業作業は、松尾信一が行った。
9. 二室塚古墳の墳丘測量と航空写真及び石室図面のレベル記入・トレースは、株式会社相互技研に委託した。
10. 卷頭の二室塚古墳の墳丘及び石室の写真（卷頭2下を除く）と図版26の写真は、阿南写真工房阿南辰秀氏の撮影である。
11. 調査担当及び本書の編集・執筆は、文化財課技師吉田野乃が行った。
12. 八尾市教育委員会では、今回の調査成果をもとに、高安古墳群二室塚古墳石室について、平成18年度の八尾市指定史跡として指定した。

## 本　文　目　次

I. 高安古墳群(大窪・山畑南地区) 詳細分布調査報告	1
〈付載1〉 大窪・山畑21号墳表面採集の遺物	11
〈付載2〉 服部川54号墳表面採集の遺物	12
〈付載3〉 服部川地区で確認した石切場跡の踏査報告	13
II. 高安古墳群 二室塚古墳の測量等の調査報告	14

# I. 高安古墳群（大窪・山畠南地区）詳細分布調査報告

## [調査の経緯]

高安古墳群は、八尾市の生駒山麓に分布する6世紀を中心に造営された横穴式石室を主体とする群集墳である。横穴式石室の規模の大きさにおいても国内でも有数の群集墳であり、学史上も著名な古墳群である。このことから八尾市教育委員会では、この高安古墳群について、国指定化を目指した保存計画を策定するため、詳細分布調査を行うこととした。詳細分布調査は、高安古墳群が最も集中する地域である服部川地区について、平成15年度から開始し、平成16年度から文化庁国庫補助事業で調査を行い、平成17年度に服部川地区を終了した。本年度は、服部川地区的北側の大窪・山畠南地区を対象に、詳細分布調査を行った。本市では、山麓全体に分布する後期古墳について、高安古墳群の遺跡名を付しているが、服部川・大窪・山畠地区的南側、郡川の地域に最も古墳が集中し、この地域は、從来から「高安千塚」とも呼ばれてきた。将来、「高安千塚古墳群」として、新たに遺跡名を付する事も考慮に入れ、詳細分布調査にあたっては、高安古墳群集中地域を先行して、調査している。このため、本年度は、大窪・山畠地区においても、古墳の集中する南側の地区を対象に、詳細分布調査を行った。ただし、大窪・山畠地区において、これまでの八尾市教育委員会の調査で確認されている古墳については、今回の詳細分布調査の範囲から外れているものについても、調査を行った。なお、大窪・山畠55・56号墳については、今回の詳細分布調査の範囲外の既往調査の古墳の確認の際に、これまで確認されていなかった古墳を新たに確認したものである。詳細分布調査の範囲は、第2図に示しており、範囲外の古墳について、番号を入れている。詳細分布調査の範囲の古墳及び古墳状地點については、第3図に示している。

## [調査概要]

高安古墳群の研究史については、平成17年度の報告書において紹介したため、ここでは省くが、既往の分布調査によって確認された古墳との照合については、松江信一氏によって照合が行われており<sup>註1</sup>、今回も氏の研究成果に基づいた対照表を、表2に作成した。

今回の詳細分布調査も、昨年度に引き続き、生駒西麓の地域を対象に、地区ごとに古墳番号を付して、網羅的な調査を行った。今回、山麓全体の調査地区割図を作成したので、掲載しておく(第1図)。詳細分布調査はこの地区割図ごとに、古墳番号を付している。今回、調査対象とした大窪・山畠地区は、地区境界線が複雑に入り組んでいるため、二つの地区を合わせて大窪・山畠地区とした。古墳の位置については、1000分の1の地図に古墳の位置を記し、墳丘及び石室の略測図の作成と写真撮影を行い、台帳としてまとめた。また、今後の開発事業等に対応するため、現状を見て古墳である可能性を有する地點については、古墳状地點として、1000分の1の地図に位置を記した上で、台帳作成・写真撮影を行った。なお、地點番号については、地区ごとの番号ではなく、全体での統一番号となっている。

詳細分布調査の現地作業は、平成18年12月19日から平成19年3月7日までの実働18日間で行い、既に確認されている古墳を含め56基の古墳と79地點の古墳状地點を確認した。

最後に、この地区的詳細分布調査を行うなかで、気づいた点について、簡単に記しておきたい。大窪・山畠南地区では、服部川地区のように、植木垣の開墾のため、石室がドルメン状になっているものよりは、大窪・山畠28・45・50・51号墳、古墳状地點157・158・159のように、石室の石材が抜取られた痕跡が多くみられる。また、古墳状地點187のように、付近の石室から石材が抜取られ、石材が集められたかとみられる場所に、矢穴の残る石を確認している。本地区では、後世に古墳の石室石材が意図的に抜取られ利用されることが、比較的多かったものとみられる。

註1 松江信一1998年「高安古墳群分布番号対照表」(八尾市立歴史民俗資料館蔵) 高安城を探る会

表2 高安古墳群 大窪・山畠南地区古墳一覧表

番号	古墳名	墳丘		石室								保存状況		
		形狀	法量(単位:m) 墳丘径 (現存径)(現存高)	形式	石室長				法量(現存部での法量・単位:m) 玄 室 蓋 底 道					
					長	幅	高	長	幅	高	長	幅		
宝山1	日吉寺墓地 4号墳	円墳	18.0	5.5	右片袖	7.5	4.2	2.5	2.3	3.2	1.7	2.2	S-46°W	非常に良好
宝山2	日吉寺墓地 3号墳	円墳	12.0	4.8	右片袖	4.8	3.7	1.9	1.6	1.1	1.0	0.7	S-20°W	良好
宝山3	来迎寺北 古墳	円墳	20.0 (推定)	2.3	未開口のため不明								良好	
宝山4		円墳	16.0 (推定)	4.0	不 明								半 壊	
宝山5	美濃各原 古墳・抜塚	円墳	13.6 (推定)	2.8	不明	3.5	3.5	1.65	1.3	不 明		S-30°W	半 壊	
宝山6		円墳	14.1	3.9	右片袖	7.2	4.0	1.65	2.3	3.3	1.2	1.4	S-40°W	半 壊
宝山7		円墳	推23.5	5.8	右片袖	15.0前後 (推定)	6.0前後 (推定)	3.0前後 (推定)	不明	6.6	2.2	2.0	S-70°W	やや良好
宝山8		円墳	13.0	3.6	右片袖	6.4	4.5	1.65	2.2	2.1	1.2	1.3	S-60°W	半 壊
宝山9		円墳	13.8	4.3	右片袖	不 明	2.0	3.15	不明	0.97	1.25	S-20°W	良好	
宝山10		円墳	13.9	4.4	右片袖	8.2	3.9	1.82	3.1	4.0	1.5	1.7	S-60°W	良好
宝山11		円墳	15.0	2.9	不 明								不明 非常に良好	
宝山12		円墳	18.0	4.3	右片袖	5.6	3.4	2.2	2.5	1.7	1.6	1.3	真西	未開口のため 不
宝山13		円墳	12.6	3.0	右片袖	5.0	4.1	1.96	2.1	1.0	1.3	1.25	S-40°W	良好
宝山14		円墳	不明	不明	不 明								不明 良好	
宝山15		円墳	14.5	不明	未開口のため不明								不明 未開口のため 不	
宝山16		円墳	13.6	3.0	未開口のため不明								不明 未開口のため 不	
宝山17		円墳	10.7	不明	未開口のため不明								不明 未開口のため 不	
宝山18		円墳	不明	不明	不明	不明	残3.0	2.3	不明	不 明		W-44°S	未開口のため 不	
宝山19		円墳	18.0	7.7	未開口のため不明								S-60°W 付近か	
宝山20		円墳	13.5	4.5	右片袖	6.98	3.8	2.11	2.4	3.18	1.39	0.9	S-40°W 付近	良好
宝山21		円墳	12.5	6.4	右片袖	6.0	3.35	2.15	3.0	4.55 (推定)	1.25	1.2	S-20°W	良好
宝山22		円墳	10.8	4.6	右片袖	4.7	3.3	2.1	2.7	1.4	1.45	1.2	S-20°W	良好
宝山23		円墳	8.5以上	3.8	不明	不 明	不 明		1.5	1.2	0.7	S-50°W	半 壊	
宝山24		円墳	14.0	4.3	右片袖	9.5 (推定)	4.5	1.95	1.9	5.5 (推定)	1.4	0.98	S-10°E	やや良好
宝山25		円墳	11.4	3.9	右片袖	9.2	4.7	1.8	2.4	4.4	1.25	1.4	S-60°W	良好
宝山26		円墳	13.8	4.4	不明	3.2	3.2	1.8	1.8	不 明		S-30°W	半 壊	
宝山27	俊徳丸塚群	円墳	15.0	3.8	右片袖	7.0	4.1	2.1	2.6	2.9	1.15	1.5	S-70°W	良好
宝山28		円墳	18.0	4.9	不明	10.1以上	4.6	2.3	1.5	5.5以上	1.4	1.6	S-48°W	未開口のため 不
宝山29		円墳	不明	不明	右片袖	7.7	3.7	1.85	2.5	4.0 (推定)	1.18	1.0	S-20°W	良好
宝山30		円墳	13.3	4.0	右片袖	7.7	3.7	不 明		1.4	1.6	S-48°W	良好	

番号	既往調査の古墳番号				古墳の現状・特記事項他	文献番号	既往の測量・実測等備考	第3回での 追加の記録
	市文化財 監査目録 (H5~6年) (535~58年)	市文化財 監査目録 (H6~H8年) (535~58年)	大原町 教育委員会 (S41~43年) (548~549年)	中田道勝 農業生産者組合 (S35~37年) (535~537年)				
宝山1	1号墳	21号墳		21号墳	42号墳	2号墳	山林(もとは椿木塚)。壇丘、石室とも良好。	(1)
宝山2	2号墳			37号墳			山林(もとは椿木塚)。埴丘部分が削り取られ、東面は複数面積。石室は東側の壁面のみで、他の壁面は土で埋め尽され、玄室が長方形で規則的。	(1)
宝山3	3号墳			38あいな 39号墳			山林(もとは椿木塚)。平成2年病害虫で石材部分が破壊され流れ土堆に覆われる事象あり。蓋板は倒壊部。土室蓋石、玄室風。	(1)
宝山4	4号墳			40号墳	1号墳?		山林(もとは椿木塚)。埴丘西から南にかけて削平。石が露出。平成22年に須恵器片出土。	(1)
宝山5	5号墳	22号墳	窟7	22号墳	43号墳	3号墳	山林(もとは椿木塚)。埴丘は掘り起しの形態ではなく、石室が半削平のため形状不規則。石室は上層部を複数段積みで構成。	(2)
宝山6	7号墳	25号墳	窟9	25号墳	48号墳		墓地内。埴丘東側削平があり、小型石材を用いた古式の石室。石室は石室相当部分のみ、土室に近づくほど、大きくなる傾向。	在田勝広氏 石室実測
宝山7	8号墳	24号墳	窟10	24号墳	49号墳	5号墳	墓地内。埴丘は石室相当部分を中心に削除。玄室部分は残存せず、裏側が少しある。土室に近づくほど、大きくなる傾向。本室は空室であったと思われる。	在田勝広氏 石室実測
宝山8	8号墳	23号墳	窟8	23号墳	46号墳	4号墳	山林、埴丘、石室とも良好に保存。二上山系凝灰岩製石棺材片あり。	
宝山9	12号墳	32号墳	窟15		84号墳	27号墳	山林、埴丘削平。石室は削除するが、剥離部を露出しておらず、天井の高さが保たれており、蓋板が割れ落ちておらず、石室側面は削除なし。	
宝山10	13号墳	33号墳	窟14		85号墳	28号墳	山林、埴丘、石室とも良好に保存。二上山系凝灰岩製石棺材片あり。	
宝山11	11号墳	36号墳	窟24		67号墳	7号墳	私有地内のため今回未調査。巨石のみ確認。	
宝山12	10号墳	37号墳	窟23	中山千塚 1号墳	69号墳	9号墳	私有地内のため今回未調査。	在田勝広氏 石室実測
宝山13	9号墳	38号墳	窟22	中山千塚 2号墳	70号墳	10号墳	私有地内のため今回未調査。天井石露出。蓋の一部が割れた。沢井氏調査時、石棺材片確認。	
宝山14					66号墳		私有地内のため今回未調査。宝山11の南。	
宝山15	25号墳			中山千塚 3号墳	88号墳	32号墳	私有地内のため今回未調査。内部は未確認。	
宝山16	24号墳		窟13			33号墳	私有地内のため今回未調査。石材のみ散在。	
宝山17	23号墳				89号墳		私有地内のため今回未調査。石材のみ散在。	
宝山18							撲滅内。玄室基底部の一部のみ残存。(構造後、消滅)	(3)
宝山19	22号墳	34号墳	窟12	34号墳	90号墳	34号墳	山林、埴丘周囲削平あり。石室開口部埋没するが、南北両付近に閉塞石と見られる石が埋没している。	
宝山20	21号墳	35号墳	窟11	35号墳	91号墳	35号墳	山林、埴丘削平あり。石室開口部埋没するが、南北両側面は削除してあり、又蓋板部が剥離している。石室計測結果は仄見による。作業用車両が運行するため、石室側面は削除される。	1B区
宝山21	20号墳	31号墳	窟16	31号墳	61号墳	20号墳	山林、埴丘削平あり。天井石を剥離して、天井石のまわりが石室の石室。剥離部は蓋板が剥離する。作業用車両が運行する。	(4)(5)
宝山22	19号墳	30号墳	窟17	30号墳	60号墳	19号墳	山林、埴丘周囲削平あり。ドーム状の玄室をもつ古式の石室。剥離部は蓋板が剥離する。作業用車両が運行する。	在田勝広氏 石室実測
宝山23	17号墳		窟18		78号墳	13号墳	山林。埴丘北側削平。玄室上半が削平され、土が流入し、底面の一部が確認できる。	
宝山24	16号墳		窟20		77号墳	14号墳	山林。埴丘南半部消失され、天井石露出するが概して良好。玄室が長方形の特徴的な石室。	在田勝広氏 石室実測
宝山25	90号墳	40号墳	窟5	40号墳	220号墳	37号墳	埴丘削込や削平あり。天井石露出するが概して良好。玄室前半、底面欠け。W・ガウンド、立石の古墳として石室内写真撮影。	(6)
宝山26	91号墳	39号墳	窟6	39号墳		36号墳	埴丘削込や削平あり。天井石露出するが概して良好。玄室前半、底面欠け。W・ガウンド、立石の古墳として石室内写真撮影。	(7)
宝山27	89号墳	41号墳	窟4	41号墳	221号墳	38号墳	埴丘削込や削平あり。天井石露出するが概して良好。玄室前半、底面欠け。W・ガウンド、立石の古墳として石室内写真撮影。	(8)(9)
宝山28					63号墳	30号墳	山林。埴丘中央に石室抜け取りの落ち込みあり。一部石残存。	
宝山29							平成17年鹿児島県調査報告書上。石室は天井石が角されているものの良い状態。底面は削平。石室の天井石は石室の奥に埋設してある。石室内部に二上山系凝灰岩製石棺材と、灯籠の跡跡跡。	(10)
宝山30	18号墳	29号墳	窟19	29号墳	79号墳	16号墳	山林。埴丘削込や削平あり。天井石露出。石室内に二上山系凝灰岩製石棺材片あり。	在田勝広氏 石室実測

番号	古墳名	埴丘			石室								保存状況	
		形 状	法量(埴丘径・m)		形 式	石室長	法量(現存部での法量・単位:m)				開口方向			
			埴丘径 (現存径)	埴丘高 (現存高)			玄 長	幅 高	底 長	通 幅				
宝山31		円墳	10.3	4.6	無袖	5.2	3.2	1.82	1.6	2.0以上か		S-14°W	良好	
宝山32		円墳	15.3	5.7	右片袖	10.65 (推定)	4.25	2.4	3.3	6.4 (推定)	1.7	不明	S-10°W やや良好	
宝山33		円墳	19.1	5.0	右片袖	9.8	4.8	2.1	1.8	5.2	1.35	1.0	S-40°W 非常に良好	
宝山34		円墳	6.5	3.0	不明	2.2	不明					S-20°W	半壞	
宝山35		円墳	13.0	3.0	不明	6.3	不明					S-30°E 付近か	半壞	
宝山36	ドルメン古墳	円墳	10.0	3.6	不明	2.4					1.8	1.7	S-50°W	半壞
宝山37	碧山古墳	円墳	19.0	3.5	右片袖	8.2	3.95	1.9	2.3	4.25	1.35	1.4	真南	非常に良好
宝山38		円墳	7.0	2.0	不明	5.0	不 明	2.0					真南	半壞
宝山39		円墳	14.0	5.7	両袖	8.2	4.9	1.9	2.0	3.2	1.4	1.3	S-10°W	やや良好
宝山40	すえの墓古墳						不明							
宝山41		円墳	14.3	6.0			未開口のため不明					S-45°W 付近か	やや良好	
宝山42		円墳	18.2	5.5			不明					南?	半壞	
宝山43		円墳	18.8	5.7	右片袖	6.07	3.82	1.74	2.42	2.25	1.27	1.28	真南	非常に良好
宝山44		円墳	18.8	5.7	右片袖	10.4 (推定)	4.0	2.55	2.5	6.4 (推定)	1.35	1.1	S-20°E	非常に良好
宝山45		円墳	11.0	2.5			不明					S-20°W 付近か	半壞	
宝山46		円墳	6.5	2.5			不明					不明	半壞	
宝山47		円墳	9.2	4.2			不明					S-50°W 付近か	半壞	
宝山48		円墳	9.3	2.6			不明					S-60°W 付近か	半壞	
宝山49		円墳	14.1	5.0			不明					S-80°W 付近か	良好	
宝山50		円墳	10.8	3.7	不 明		1.4	不明				S-20°N	半壞	
宝山51		円墳	15.0	3.8	不 明	4.8以上		不明				S-40°W 付近か	半壞	
宝山52		円墳	約12.0	4.9	不 明	4.55	2.26	2.4	不 明	明		S-40°W	半壞	
宝山53		円墳	15.9	3.1	右片袖	8.4	3.8	2.05	2.3	4.6	1.2	0.8	S-40°W	良好
宝山54		円墳	11.5	1.8	右片袖	5.2	3.9	1.8	1.8	1.3	1.5	0.7	S-50°W	半壞
宝山55		円墳	6.4	1.5	不 明	6.4	不 明	1.5	不 明	明			S-50°W	半壞
宝山56		円墳	11.6	3.0	不 明	3.5	不 明	1.4	不 明	明			S-20°W	半壞

### 凡 例

\*番号は、平成18年度に八尾市教育委員会文化財課が大塚・山塚地区で行った許認分布調査で新たに付した古墳番号である。番号の横で「宝山○」をしているのは、「大塚」「山塚○」号場の跡である。

\*石室の計測値については、一部を除いては、野洲市教育委員会の花田勝広氏の石室実測値を使用させていただいている。

\*保存状況の欄については、下記の基準で示している。

非 好 墓丘・石室とも、ほとんど削平・崩落等がみられず、良好な保存状態である。

良 好 墓丘・石室の一部に削平・崩落等があるものの、全体に良好な保存状態である。

やや良好 石室は比較的良好に運営されているが、墓丘の盛土が露出し、石室が露出している。

半 壊 墓丘・石室が、地表面に全く運営していない(調査後、埋没保存されたものは、除く)。

全 壊 墓丘・石室が、地表面に全く運営していない(調査後、埋没保存されたものは、除く)。

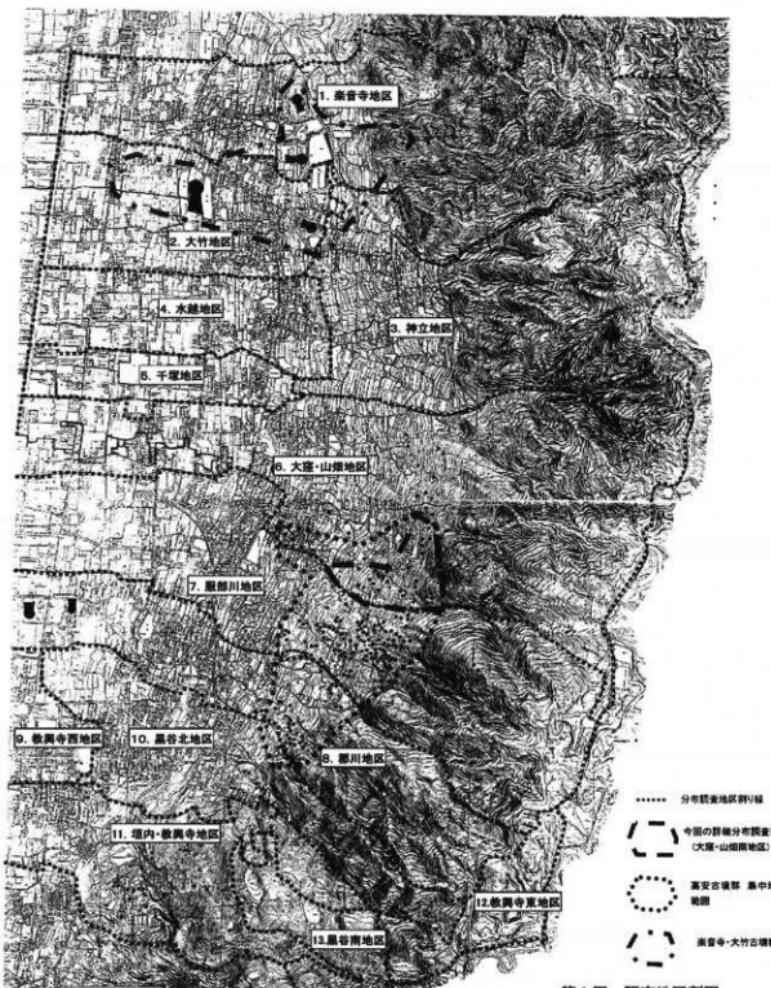
\*石室の形式の欄の「右片袖」「左片袖」は、玄室内から通路方向を見た袖の位置で示している。

番号	既往調査の古墳番号				古墳の現状・特記事項他	文献番号	既往の測量・ 実測等調査	第3回での 追跡の結果
	市文化財 調査目録 (平成5年) (H5-6年)	市文化財 調査目録 (平成5年) (H5-6年)	高安城モ 教委委員会 審査会報告書 (541-438)	田中謙 監査会報告書 (546-495)				
崖山31	14号墳	27号墳	窟21		76号墳 15号墳			
崖山32		28号墳		28号墳 75号墳 18号墳				
崖山33		14号墳		14号墳 31号墳				
崖山34	27号墳							
崖山35	28号墳							
崖山36	29号墳	16号墳	窟2	16号墳 32号墳				
崖山37	30号墳	13号墳	窟1	13号墳 30号墳				
崖山38	31号墳	15号墳		15号墳 29号墳				
崖山39	87号墳	43号墳	山1	43号墳				
崖山40								
崖山41				83号墳?	24-26号墳?			
崖山42					83号墳? 24-26号墳?			
崖山43	26号墳			73号墳 11号墳				
崖山44	42号墳			74号墳				
崖山45				57号墳? 12号墳?				
崖山46				80号墳				
崖山47				61号墳?				
崖山48								
崖山49				92号墳				
崖山50								
崖山51								
崖山52	44号墳	窟3	44号墳 222号墳	39号墳	個人宅の庭園内。石室玄室前面~後道削平。 填丘東半残存。	花田勝広氏 石室実測	第2回	
崖山53	18号墳		19号墳 35号墳		植木焼。填丘は植木抜取り等による削平や穴がある。 石室は奥壁等の穴が抜け崩落の危険あり。	花田勝広氏 石室実測	第2回	
崖山54	19号墳		20号墳 34号墳		植木焼。填丘は盛土が流出し、石室も奥壁等の 石が失われ、ドレン化している。後道部埋没。	花田勝広氏 石室実測	第2回	
崖山55					もと植木焼。填丘は西側を中心に削平を受ける。 崖面に石室左側壁が残存。	花田勝広氏 石室実測	第2回	
崖山56					もと植木焼。填丘は西側を中心に削平を受ける。 崖面に石室左側壁が石積み4段分位が残存。	花田勝広氏 石室実測	第2回	

## 文獻番号

- (1) 八尾市教育委員会1991年「八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書」  
(2) 八尾市史編纂委員会1996年「八尾市史(近古代編)」  
(3) 八尾市教育委員会1994年「八尾市内遺跡平成5年度発掘調査報告書」  
(4) 伏見太一郎1966年「高安の城跡大型の集落跡に関する一試――河内高安千歳と平尾山千歳を中心として」『古代学研究』42-43合併号  
(5) 伏見太一郎1970年「高安の城跡とその周辺の遺跡」『高安千歳と平尾山千歳を中心とした近畿の城跡』昭和41年度第1次巡回川谷他著  
(6) 上田耕藏監修「大阪府文化財調査会報告書1980-1989(第2期)」  
(7) 上田耕藏監修2007年「ロマン・センチコッター清日二千年の足跡」(社)標準考古学講会  
(7) ワイマー・リックス 優勝と遺資を収載2003年「ガイド 日本書古事記の解釈」柳原新一著  
(8) 大阪府教育委員会2004年「八尾市史(近現代編)」  
(9) 八尾市教育委員会2003年「八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書」

- (9) 足代第一郎1995年「後坂先塚地盤・春日・明神尼寺」『大阪春秋』第1号  
(9) 伏見太一郎1970年「高安の城跡」『高安古跡群(大阪府八尾市大坂所)』大坂  
22号付近地盤調査資料  
(9) 山本方1888年「奈良令全郡種類別實見記」『東洋人頭字典』第28号  
(9) 井伊五郎1888年「三國令全郡種類別實見記」『東洋人頭字典』第33号  
(9) 井伊五郎1888年「古神・穴・ドレンと源流」『理學會論文選』第56號  
(9) 大阪府教育委員会2004年「八尾市史(近現代編)」(社)標準考古学講会  
(9) 菅原修・久元健・島田和子「近畿の遺跡と遺物」1976年『大阪文化財』第3卷第2号  
(9) 通巻第5号「羽柴・清原の城跡と遺物」(社)大阪文化財センター



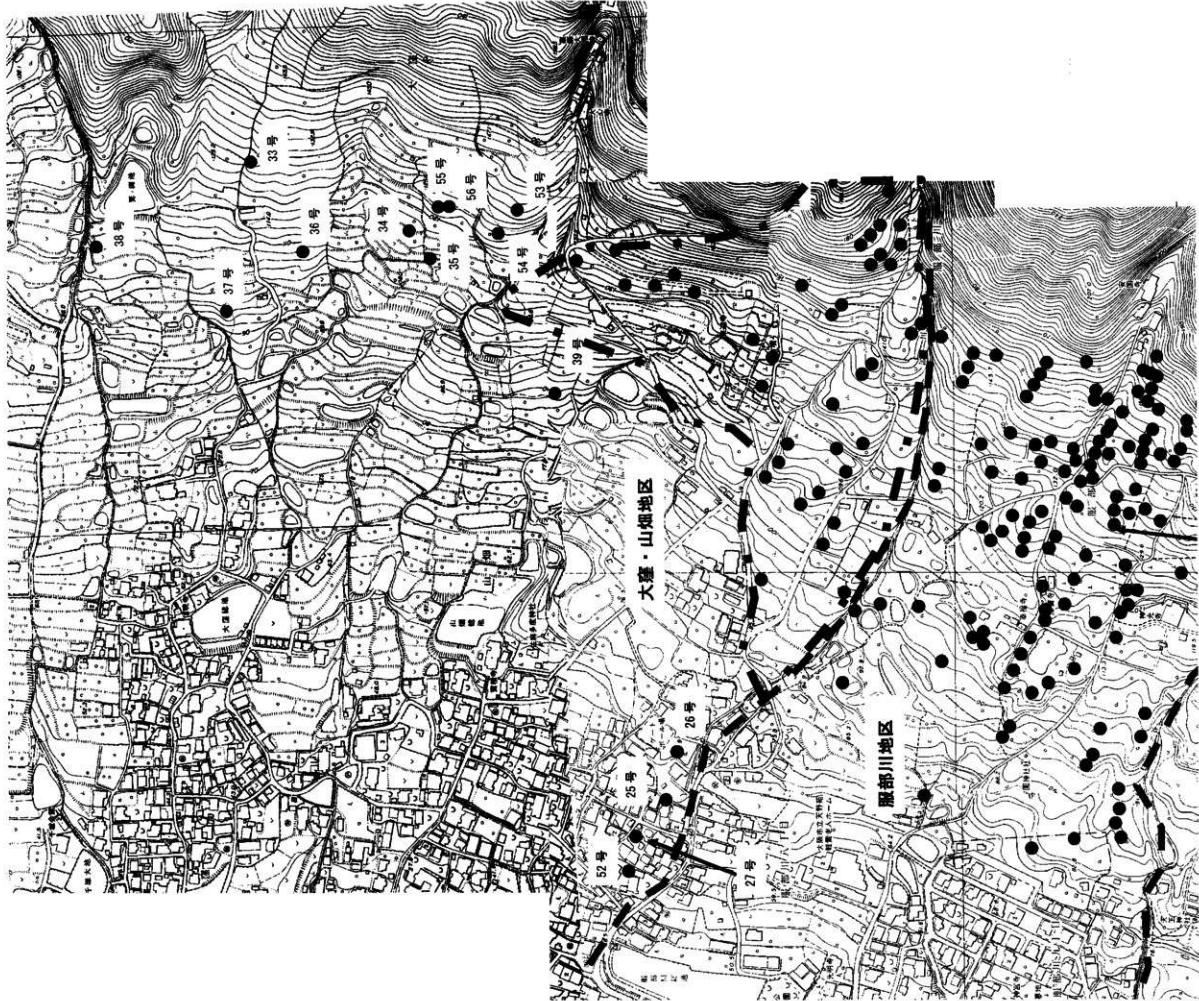
第1図 調査地区割図

場 区 番 号	地 区	古 墳 の 数	国・府・市 指定の古墳名
1	秦音寺地区	8 5 0	
2	大竹地区	3 0 2	回文陣・公子白山城 河内守家古墳
3	神立地区	8 7 1	前史跡秦安古墳
4	水越地区	0 0 0	
5	千原地区	0 0 0	
6	山畠・大庭地区	56 56 0	
7	郡内・教興寺地区	138 138 1	市史跡第二回城力塹
8	郡川地区	31 31 5	下野守家古墳(子守山城) 河内守家古墳

場 区 番 号	地 区	古 墳 の 数	国・府・市 指定の古墳名
9	教興寺西地区	2 2 0	
10	黒谷北地区	16 16 0	
11	郡内・教興寺地区	28 23 0	
12	黒谷南地区	3 3 0	
13	教興寺東地区	0 0 0	
14	忍智・神宮寺等地区	5 5 0	
	計	298 286 9	

※本表の古墳数は、平成19年3月現在の数であり、郡川地区と大庭・山畠南地区以外は、詳細分布調査を行っていないため、他の調査で確認されていても数に含めていないものもあり、今後の詳細分布調査により増加するものとみられる。

表1 高安古墳群と山畠の古墳 地区別の数 (平成19年3月現在)



今回の詳細分布調査の範囲(大窓・山畑地区)

平成 18 年度市史跡・古墳

古墳を示す  
 大庭・山畠○号墳  
 地○  
 古墳状地点を示す  
 地点○番



1

2

3

第3図 大庭・山畠南地区 古墳・古墳状地点分布図 (1/2000) (※大阪府教育委員会2004年「高安古墳群発掘調査概要」掲載の農道整備事業に伴う地形図をもとに作成。※地区割線は表2の「第3図での位置」の欄に対応する。)

## 〈付載1〉大窪・山畠21号墳 表面採集の遺物（第4図）

今回の詳細分布調査において、大窪・山畠21号墳の玄室内の流入土上面において、須恵器片5点を表面採集したので、報告しておく。本墳は、大窪・山畠地区の南東側、標高140~144mの緩傾斜面上に、大窪・山畠22号墳と並んで造られている。墳丘は、現存の直径12.5m、高さは北側で6.4mを測る円墳である。本墳の石室は、右片袖式で、石室現存長6m、玄室長3.35m、玄室幅2.15m、玄室現高3mを測る。玄室の平面プランは、玄室長に対して玄室幅が広いもので、小形の石材をドーム状に持ち送る古式の石室である。南東側に隣接する22号墳も同様の石室を有する。本墳は、白石太一郎氏が1966年の論文に、第20号墳とされ、氏の第I型式の石室を有する古墳として、石室断面を掲載されて、取り上げられた古墳である<sup>(註1)</sup>。また、本墳では、大阪府教育委員会による1966年度の分布調査時に、凝灰岩製組合式家形石棺材片を採集したと報告されている<sup>(註2)</sup>。表面採集した須恵器片は、玄室内の北東隅付近と中央付近で確認した。1は、高壺あるいは壺の蓋であり、田辺編年<sup>(註3・4)</sup>のTK10型式期頃に位置づけられる。2・3は、壺蓋であり、2はTK10型式の新段階からTK43型式期頃に、3はTK43型式期頃に位置づけられる。4は、高壺の壺部である。5は短脚高壺の脚部である。今回、採集した資料において、1の高壺あるいは壺の蓋については、須恵器型式からみると、6世紀中頃の時期とみられるものであり、石室の形態が古式であることと符合し、初葬時の副葬遺物の可能性がある。また、2については6世紀後半頃に、3については6世紀後葉から末頃の時期とみられ、追葬時の副葬遺物の可能性がある。本資料は表面採集資料であるため、資料的には限界のあるものだが、本墳の築造年代を推定するにあたっての参考資料とはなろう。

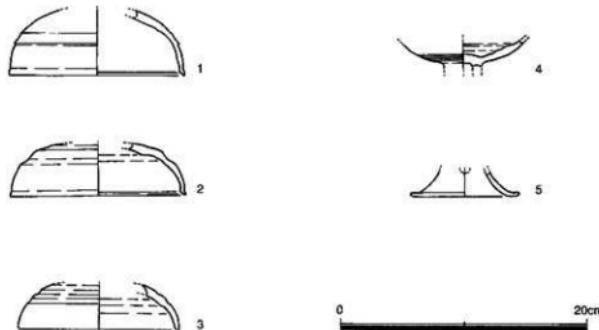
(註1) 白石太一郎 1966年「畿内の後期大型群集墳に関する一試考- 河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として-」『古代学研究』第42・43合併号

(註2) 大阪府教育委員会1966年「八代市高安古墳群の調査- 昭和41年度第1次郡川其他地区調査概要-」『大阪府文化財調査概要1965・66年度』

(註3) 田辺昭三1966年『陶邑古墓址群』。平安学園考古学クラブ

(註4) 田辺昭三1981年『須恵器大成』角川書店

遺物番号	器種	部位	法量(単位:cm)		色調		焼成	胎土
			径	最大残存高	外面	内面		
1	壺蓋		14.4	5.3	淡灰青色	灰青色	硬質	普通
2	壺蓋		14.4	4.2	灰白色	灰白色	やや軟	やや粗
3	壺蓋		13	3.7	透灰白色	淡灰白色	軟質	やや粗
4	高壺	壺部	不明	2.2	灰色	灰青色	硬質	やや粗
5	高壺	脚部	8.2	2	淡灰青色	淡灰青色	硬質	やや良



第4図 出土遺物実測図(1/4)

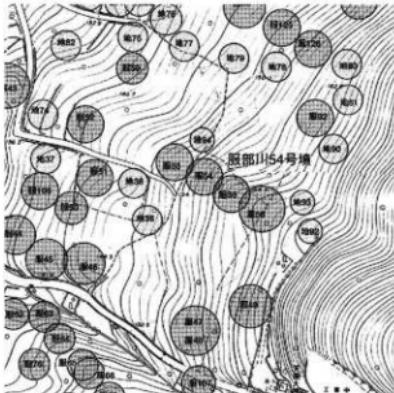
## 〈付載 2〉服部川54号墳 表面採集の遺物（第6図）

今回報告するのは、昨年の3月、平成17年度の詳細分布調査の際に、服部川54号墳の玄室内右側壁側付近の流入土上面で、表面採集した須恵器片2点と石棺材片とみられる遺物2点である。昨年度の報告書には実測等が間に合わなかったため、本年度、報告するものである。本墳は服部川地区の東側、標高150~160mの尾根上に立地する。附近には同一尾根上に、54号墳を含め、4基の横穴式石室墳が連続して立地している。本墳は、現存の直径16.9m、高さ4.5mを測る円墳である。石室は右片袖式で、現存長は9.5mを測る。玄室の平面プランは長方形で、玄室の石積みは5段から6段で積まれ、袖石は3石よりなる。

1は須恵器の坏身である。田辺編年(註1)のTK10~TK43型式期頃に位置づけられる。2は装飾器台の小片である。子壺等を高坏部口縁に取り付けた装飾器台の一部とみられる。高坏部口縁から小壺あるいは小型の壺の底部にかけての破片である。1の坏身については、須恵器の型式編年から、6世紀中葉から後葉にかけての時期とみられる。数少ない表面採集資料であるため、限界があるが、本墳の築造年代を推定する資料の一つにはなろう。また、石棺材片とみられる遺物(図版27の中段-3・4)は、端面が遺存していないため、実測は行っていないが、2点とも、残存長7~9cmを測るものである。石材種は、判然としないが、明らかに二上山産の凝灰岩とは異なる、肌理の細かい石材であり、開山塚古墳で表面採集した石棺材のうち、神戸層群の凝灰質砂岩かとしたものに類似する(註2)。

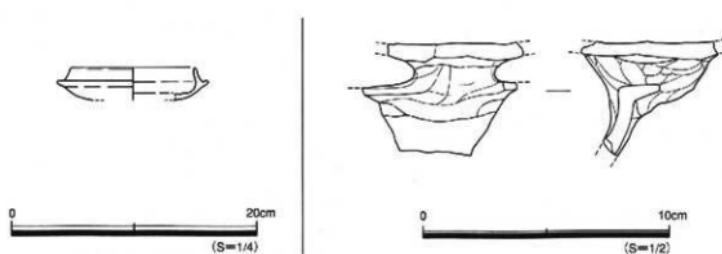
(註1) 田辺昭三1966年『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ

(註2) 八尾市教育委員会2006年『高安古墳群分布・測量調査報告書—服部川地区詳細分布調査 郡川4号墳測量・実測調査他—』



第5図 服部川54号墳位置図 (1/2000)

遺物番号	器種	法量(単位:cm)		色調		焼成	胎土
		径	最大残存高	外面	内面		
1	杯身	10.2	2.6	灰青色	灰青色	硬質	やや良
2	装飾器台		4.6	灰青色	灰青色	硬質	普通



第6図 出土遺物実測図

### 〈付載3〉服部川地区で確認した石切場跡の踏査報告

昨年度、平成18年3月20日に行った高安古墳群詳細分布調査において、服部川56号墳の東側の斜面で、石切場跡とみられる場所を確認した。この石切場跡については、時期が判然としないが、これまで八尾市の生駒西麓においては、石切場は確認されておらず、今回の確認例は、高安古墳群における石材の利用を検討する資料の一つになるものと考えられるため、ここに報告しておく。

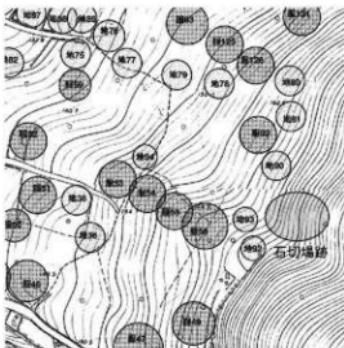
確認した位置は、服部川56号墳の北東30m付近である。付近には、花崗岩の木端かとみられるものが、散乱していた。石切場とみられる場所は、谷地形に位置し、南北6.5m前後、東西8m前後、高さ8.4mの範囲で、花崗岩の岩盤が露出しており、石を切り出した後の削面がみられ、矢穴の痕跡が二箇所、遺存していた。矢穴は、平面形状が長方形で、長さ5cm、幅2cm、深さ3cmを計る。

また、石切場跡の西側下方には、三段の段状に斜面を削った痕跡があり、一部に石垣がみられた。この段の下には平坦地があり、この平坦地を造成するために、斜面を削ったものと考えられ、石切場に伴う作業場の可能性もある。

高安地域では、古くは、天正年間の大坂城築城の際に、千塚の石を利用したという記録があり、江戸時代では、宝永2年に大阪市平野に所在する融通念仏宗の本山大念佛寺の礎石を、高安の村々からも調達している(註1)。また、八尾市立歴史民俗資料館には、服部川地区で、近代に活用された石材を運ぶバラリキが保管されている(番海註1)。これらの所例は、高安古墳群の石室石材や自然の転石を利用したものとも考えられる。実際に、高安古墳群では、黒谷7号墳(妙見寺境内2号墳)や、今回、確認した山畑の古墳状地点187のように、石材に矢穴が遺存するものがある。

今回、確認した石切場跡のあり方からは、近世あるいは近代のいつの時期かは判然としないが、高安地域では、花崗岩の露頭からの石の切り出しも行われていたものと考えられる。今回の報告では、資料の検討不足のため、不明の部分が多い。多くのご教示をいただければ、幸いである。

(註1) 小谷利明2005年「八尾市高安地域の石材活用の一事例」『関西近世考古学研究13 石から見た近世文化』関西近世考古学研究会



第7図 石切場跡位置図



石切場跡 南西より



矢穴の残された石 (矢印位置が矢穴)

## II. 高安古墳群 二室塚古墳の測量調査等の報告

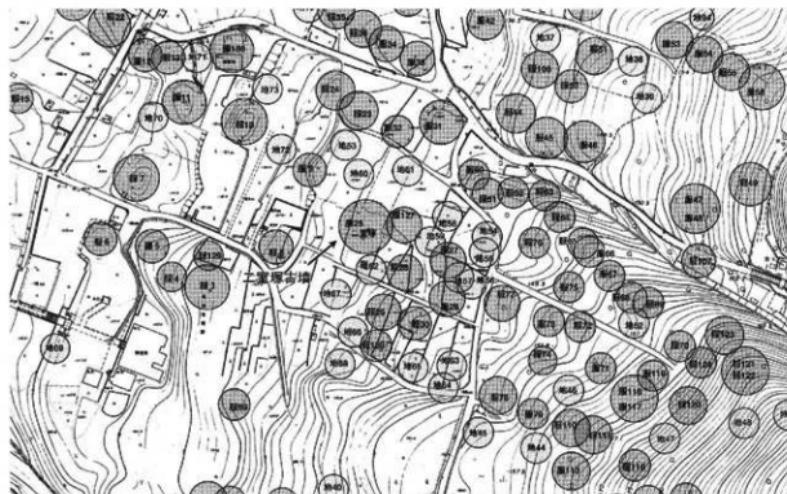
### 1. 調査の経緯

本年度は、服部川の二室塚古墳について、その文化財的価値を明らかにし保存を計るため、墳丘測量と写真撮影を行った。石室については、既に野洲市教育委員会の花田勝広氏が実測調査をされており、今回、氏の実測図の原図（S-1/40）のトレースとレベル線の記入を本課で行ったうえで、第10図に掲載した。測量については、（株）相互技研に委託し、平成18年10月16日～10月27日の間で、電子平板による実地測量を行い、0.2mセンターで、スケール1/100の図を作成するとともに、平成18年10月22日航空写真撮影を行った。また、今回の調査においては、二室塚古墳の墳丘に重なるように、右片袖式の横穴式石室である服部川127号墳が造られているため、127号墳についても併せて墳丘測量を行った。さらに二室塚古墳については、阿南写真工房の阿南辰秀氏に、写真撮影を委託し、石室内部の清掃を行ったうえで、平成18年10月30日、11月6日～8日で写真撮影を行った。

### 2. 調査概要

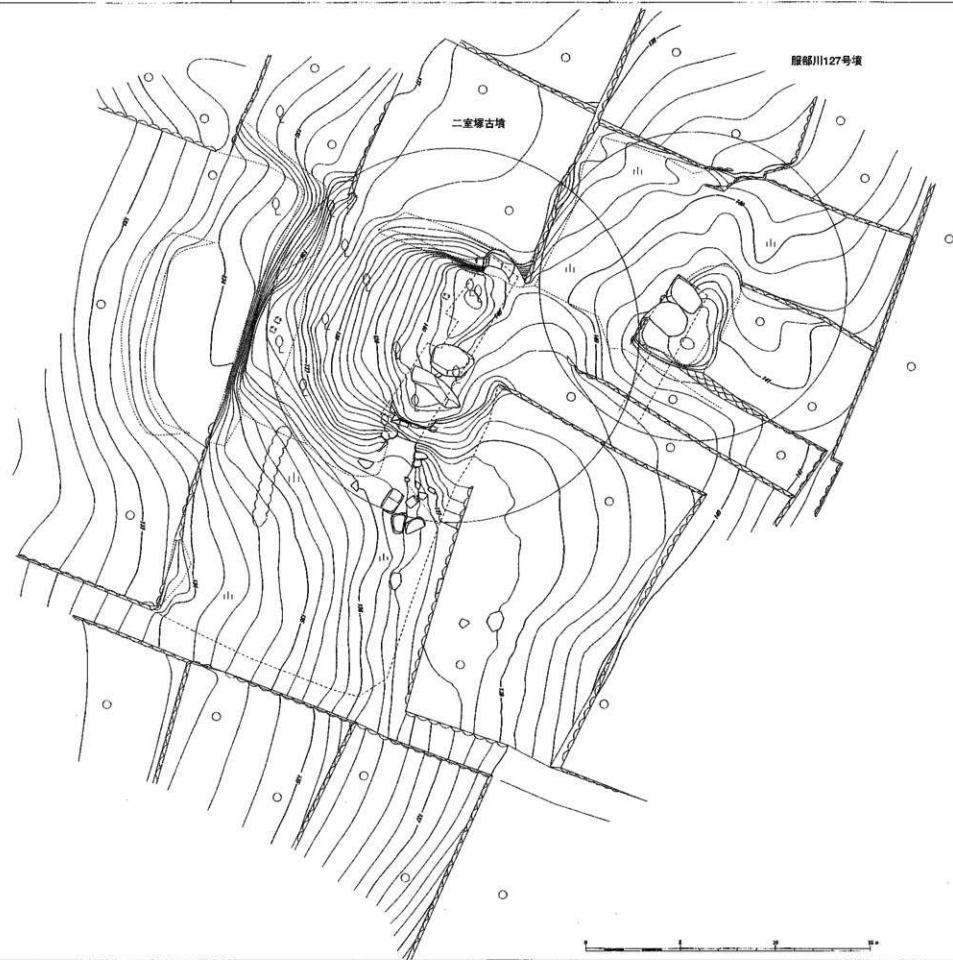
#### 【位置と環境】（第8図）

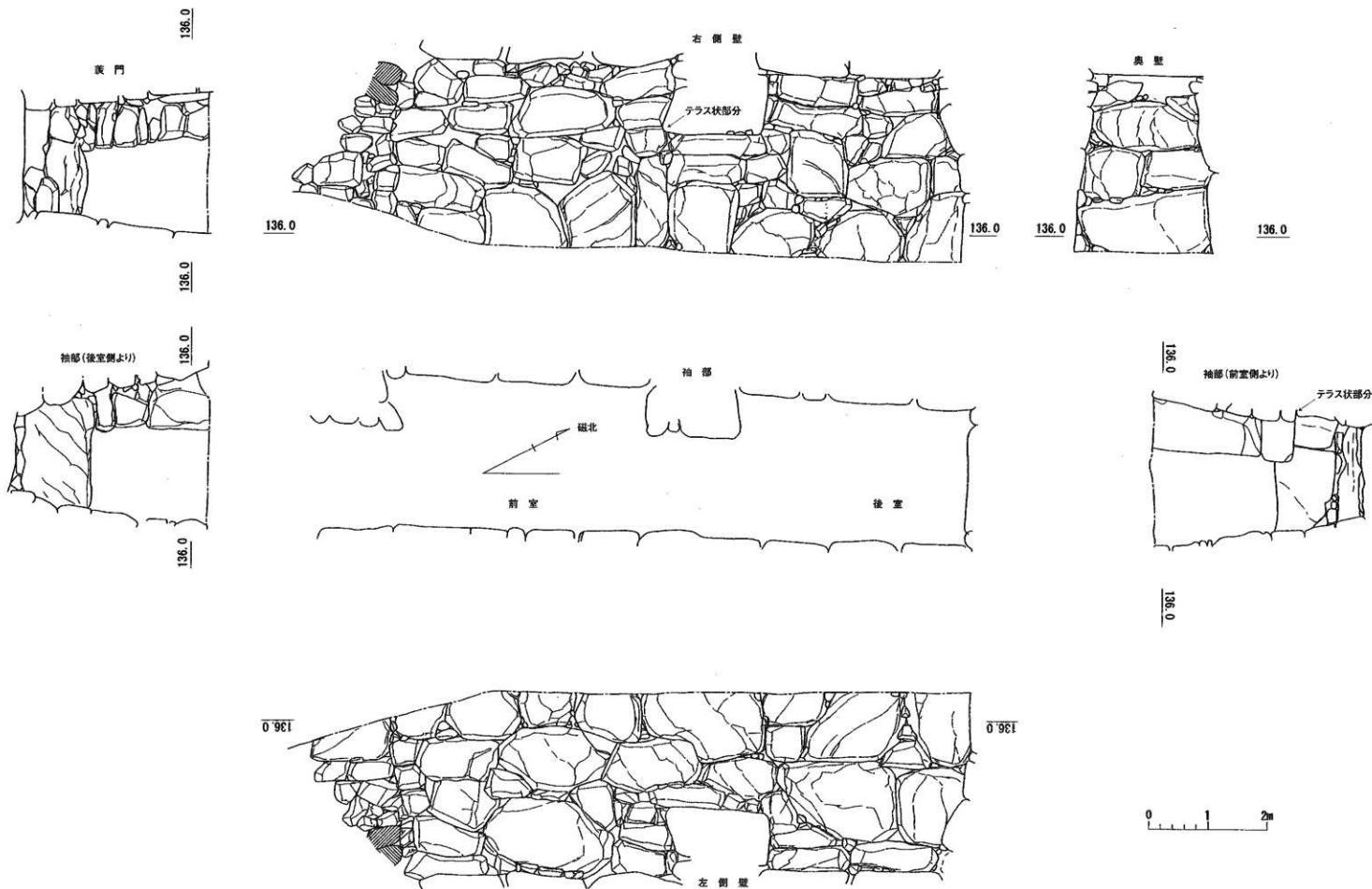
二室塚古墳は、八尾市服部川693-21の一部及び本地番に東接する無番地付近に所在する。ここは、八尾市の東部山麓に広がる高安古墳群の中でも、「高安千塚」と称される、最も古墳の集中する地域にあって、さらにその中心地域である服部川地区に位置する。二室塚古墳の周辺は、墳丘を重ねるようにして、古墳が密集しており、二室塚古墳の墳丘北東側は、服部川127号墳の墳丘裾と重複する。二室塚古墳は、標高133m～140mの見晴しの良い緩傾斜面の尾根上に造られており、古墳の東西には、同一尾根上に築造された古墳が並ぶ。二室塚古墳の現況は、墳丘の石室上部が、雑木で覆われており、特に墳頂には高さ8m近くにもなる高木が生えている。周囲は植木畠に囲まれているが、南側は現在植木畠として使用されていないために、平地となっている。



第8図 二室塚古墳位置図 (1/2000)

第9図 二室塚古墳・服部川127号墳 墓丘測量図(1/200)





第10図 二室塙古墳 石室実測図 (1/60) [花田勝広氏 実測図をトレース]

### [墳丘の測量調査] (第9図)

墳丘測量図から、墳丘の規模と形状について、みてみたい。墳丘の裾は、墳丘南西側の等高線のあり方から、標高135m～136m前後になるかとみられる。石室の床面については、大阪府教育委員会による昭和41年度の調査により、床面清掃が行われたと記述されていることから(註1)、ほぼ現況の床面が、本来の床面の高さであるとすれば、標高135.5m付近となり、先述した墳丘南西側の等高線のあり方とも矛盾せず、この高さが墳丘の裾になるものとみられる。また、墳丘の北東側には、墳丘裾の名残りかと見られる緩やかな谷状地形がみられる。この位置と先の墳丘南西側の標高135.5m付近の位置とを、石室長軸上に結ぶと長さ20m前後となる。またこの線を折半する点、すなわち墳丘の中心点は、石室の前室と後室の間の点となる。この点を中心として、東西方向に直径20mの墳丘範囲を想定すると、西側は、標高135mの等高線のある崖面付近となる。これより西側に墳丘が広がるとは地形的に考えにくいことから、この付近が西裾とみられる。東側は、谷状に削平されているため判然としないが、西側の墳丘のあり方からみて、東側も本来は、石室から半径10m前後までが墳丘範囲となるものと思われる。

なお、墳丘西裾の推定線のさらに西側の標高132m～134m付近の等高線も、緩やかな円弧を描いている。当初は、これも二室塚古墳の墳丘の痕跡かと考えたが、石室の位置や、周囲の地形から見て、ここに墳丘裾を推定することは、困難である。墳丘中心部からこの円弧状の張り出しの地形を結ぶ円を描くと、北側・東側・南側の地形は、谷地形である。墳丘の西側を画するために、地形を半らに整地した痕跡か、あるいは、別の占墳が存在したのか、判然としない。

二室塚古墳の墳丘範囲は、石室の前室と後室の間の点を中心として、直径20m前後の範囲と考えられる。通常の横穴式石室の墳丘は、奥壁付近を墳丘の中心の位置に設定される場合が多いが、玄室を二つ有する二室塚古墳においては、墳丘の中心が、前室と後室の間の点に設定されていた可能性が高い(註2)。このことから、二室塚古墳の墳丘範囲は、石室の前室と後室の間の点を中心として、直径20m前後の範囲と考えられる。墳丘の高さは、墳頂部の最高点が標高140.63mであり、墳丘の裾の高さは標高135.5m前後となることから、高さ5.1m前後と推定される。

さらに、墳丘の残りの良い墳丘西側から南側の等高線を詳細にみると、南北に直線状に延びており、この部分を見ると、本墳が方墳になる可能性も想定できるが、墳丘南面の等高線はむしろ円弧を描くようであり、判然としない。このことから、直径20m前後の円墳ないしは一辺20mの方墳の可能性も考えられる。

墳丘の保存状況は、北側と東側にかけて、植木垣の造成のために削平を受けているものの、墳丘の石室部分及び墳丘の西から南にかけては、残りが良く、特に墳丘の南側からは、石室の開口部と墳丘のあり方がよくわかる。概して良好といえよう。

なお、墳丘の北東側は、服部川127号墳の墳丘が一部、重なる形となり、測量図をみると限りでは、服部川127号墳が二室塚古墳の墳丘の北東側に載る形となることから、服部川127号墳は、二室塚古墳の後に築造された可能性が考えられる。

### [石室の状況] (第10図・巻頭写真・図版26)

第10図の花田氏作成の石室平面図をもとに、その構造と規模をみていきたい。

石室の開口方向は南西方向で、S-56°-Wである。石室は、右片袖式の複室構造で、全長11.2mを測る。石室の法量は、下表のとおりである。

単位:m	後室	袖部	前室	羨道
長さ	3.82	1.5	4.4	1.6
幅	2.3	1.7	2.4	1.6
高さ	3.05	2.0	3.2	1.8

表5 二室塚古墳石室各部の法量

石室の石積みは、羨道以外は、径1~2mの石材を中心に3~4段に積んでいる。前室・後室間の袖部は、通常の石室とは異なり、垂直方向に二列の石材により構成される。前室・後室間の壁をなす天井石は、後室側の三段積み（縦石1石+横石2石）の上に架構され、さらに右側壁側に、小振りの石が天井石として載せられる。袖部の前室側は、縱長の石に小振りの石を2段積みとするが、この上には、天井石がほとんど乗らないために、上部はテラス状になっている。しかし、これは通常の石棚といるべきものとは捉えられない。むしろ、袖部を二列の石材で構成し、この部分を構造上、補強させるとともに、前室側の袖部は天井石がほとんど載らないために、独立した柱状の形状となっている点が、注意される。

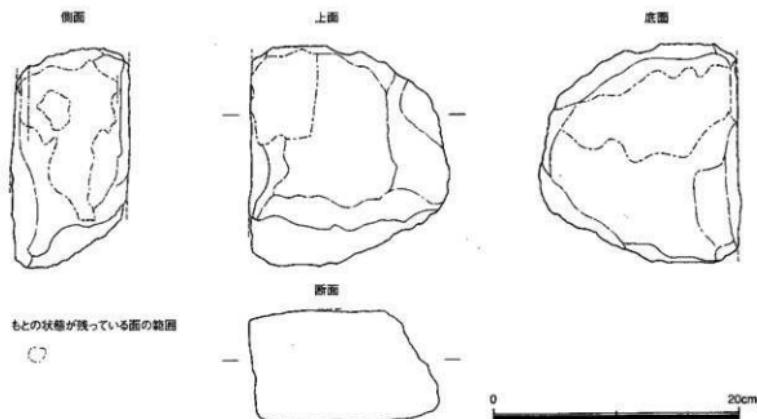
羨道の石材は、径0.8m前後の小振りなどを平積みして積んでおり、袖部となる右側壁では、石材が小振りなためか、ややドーム状に持ち送られている。二室塚古墳の羨道は、石材が一部欠失しているため判然としないが、石材も小振りで、長さも短かい事が、特徴的である。

次に、石室の保存状態をみておきたい。石室は羨道と前室の間の天井石一石が崩落しており、羨道の右側壁も一部欠失している。この部分は石材が小振りなだけに崩壊の危険がある。また、羨道端の基底石も一部、欠失している可能性がある。この付近の石は、石室開口部の南側に転落して、現存する。奥壁の最上段の石も外側に崩落しており、ここから土が流入し、後室の奥壁付近に、高さ0.9m前後の小山状に堆積していた。これは、昭和41年度の大阪府教育委員会の調査以降に堆積したものとみられ、今回の写真撮影に伴い、除去した。また、前室の右側壁の石材も2箇所程、石材が欠失している。このように石室の保存状況は、羨道部分を中心に石材の崩落がみられるが、他は概して良好に遺存している。

#### 【出土遺物】(第11図)

写真撮影のための清掃に伴い、二上山産系凝灰岩製とみられる石膏材片1点を採集したが、須恵器等

遺物番号	器種	法量(単位:cm)			色調	石材種	調整等
		最大残存長	最大残存幅	最大厚			
1	底板か	17.6	16.2	9.6	淡灰白色	二上山産系	調整は明瞭に見えず。赤色調 白色凝灰岩 料が表面と側面に残存。



第11図 二室塚古墳表面採集石膏材 実測図 (1/4)

の遺物は確認できなかった。今回、採集した石棺材片は、二室塚古墳の清掃に伴い、転落石材とともに、石室外に持ち出した段階で確認したため、出土位置が前室か後室かは判然としない。組み合わせ式の右棺の底板とみられる部材である。最大長17.6cm、最大厚9.6cmを測る。上面と側面は、比較的滑らかであるが、製作に伴う調整は、摩滅のため確認できなかった。底面は、凹凸がやや残り、調整が粗いようである。また、上面と側面には、赤色顔料の塗布が僅かに認められた。なお、大阪府教育委員会による昭和41年度の調査概要によると、床面には盜掘のために生じた穴が随所に見られ、ほとんどどの状態を残しておらず、敷石等の施設も認められなかったとある。また、床面上に堆積する土の中から、石棺材とみられる凝灰岩小片、耳環2点、土師器、須恵器の小片が出土したと記述されている(註3)。

#### [築造時期]

出土遺物が僅少なため、築造時期を考える材料に欠くが、石室の石積みの方法等からみれば、6世紀後半頃と考えられる。

#### [まとめ]

今回の測量調査及びこれまでの調査から、二室塚古墳は、6世紀後半頃に築造された直径20m前後、高さ5.1m前後の円墳ないしは一辺20mの方墳の可能性のある事がわかった。また、石室は複室構造で、石室内には、凝灰岩製組合式石棺が納められていたことが確認できた。また保存状況は、石室・墳丘とも概して良好であることが、確認できた。

### 3. 二室塚古墳の複室構造について

高安古墳群において、複室構造の石室は、今回調査した服部川の二室塚古墳の他に、郡川の交互通二室塚古墳がある(註4)。二室塚古墳は、前室・後室ともに、右片袖式であるのに対し、交互通二室塚古墳は、前室が左片袖式、後室が右片袖式となる。二室塚古墳・交互通二室塚古墳にみられる複室構造の石室は、全国的にも類例がない。

柳沢一男氏によると、玄室の前面に1つないしは2つの前室を設けた複室構造の石室は、全国で約1030基が知られ、九州・四国・近畿・北陸・東海・関東の各地に広がり、なかでも、九州中北部には、850基を上回る複室構造が集中するとされる。柳沢氏によると、九州の複室構造の石室は、早くに乙益重降氏が指摘されたように、肥後北部を起源とし、柳沢氏のいわれる「淡道間仕切り型」として独自に発案されたものと考えられている(註5)。

奈良県、兵庫県で僅かに確認できる複室構造に近い例では、奈良県奈良市の帝解黄金塚古墳例が、淡道が三室に分かれる構造である(註6)。兵庫県宝塚市中筋山手東2号墳例は、山崎信二氏が指摘されているように、高安古墳群の複室構造とは大きく異なり、九州の複室構造の影響は受けているが、地域性の高いものである。

二室塚古墳の石室の特徴についても、山崎信二氏により、既に指摘されている(註7)。山崎氏は、右側壁を含む正面を作成・提示されたうえで、九州の複室構造が、両袖式で、玄門立柱が内側に張り出し、後室が広く前室が狭いという、定型化した構造であるのに対し、二室塚古墳・互通二室塚古墳の石室は、畿内型の片袖式の石室を2基連結した形をなし、後室より前室の優位性がむしろめだつとされている。特異な構造として、九州の影響を受けて築造されたものではなく、高安古墳群に多くある単室構造の横穴式石室の特徴の中に、その基本的な性格が内包されているとみられている。

二室塚古墳は、高安古墳群内の中規模の右片袖式石室を縦に繋いだような構造である。互通二室塚古墳も、中規模の右片袖式の石室に、中規模の左片袖式の石室を縦に繋いだような構造である。畿内の横穴式石室の属性分類に基づく研究をなされた太田宏明氏は、二室塚古墳の石室について、玄室側壁3類、袖部3類、奥壁4類、前壁3類という典型的な畿内型石室5~6群の石室であることを、指摘されている(註8)。

高安古墳群の二室塚古墳、そして互通二室塚古墳の特徴は、まさに、山崎氏や太田氏が指摘されたよ

うに、高安古墳群に通有の畿内型の石室の中から、独自に生み出されたものといえる。

なお、九州における複室構造の石室においては、前室という空間自体が葬送儀礼が行われ、その結果として上器が副葬される場所として機能していたと考えられることが指摘されている<sup>(註9)</sup>。二室塚古墳、交亘二室塚古墳については、前室・後室とも、埋葬を主体とする場として、当初から、意図して構築されたことは明らかである。高安古墳群においても、服部川47号・48号墳、服部川116号・117号墳、服部川121号・122号墳、大津・山畠43号・44号のように、同一墳丘に、二つの石室が造られているとみられるものは存在するが、二室塚古墳、交亘二室塚古墳の場合は、これとは異なり、葬送に際して、埋葬の場としての玄室を二つ繋げる必要のある何らかの特殊な事情があったとみられる。

さらに、このような複室構造の石室が当時の畿内政権の拠点であり、畿内型の大型横穴式石室が多くある大和には、存在しないことも注意される。二室塚古墳、交亘二室塚古墳は、畿内中枢部の高安古墳群にあって、独自の系譜ともいえる複室構造の石室をもつておいて、当時の政権下にありながら、独自の石室構造を発案できる独自性と、高度な技術を有した被葬者集団のあり方をうかがわせるものである。二室塚古墳の石室は、畿内中枢部の横穴式石室の系譜を考えるうえで、大変重要なものである。さらに、右片袖式の石室を二つ繋げた複室構造としては、全国的に類例のない貴重なものである。

#### 4. 学史上の二室塚古墳

今回、調査した二室塚古墳には、明治時代に英国人の研究者であるウイリアム・ガウラントが、ガラス乾板による写真撮影を行い、「双室ドルメン」として、海外に紹介したという学史を有する。

ウイリアム・ガウラントは、明治5年（1872年）から明治21年（1888年）まで、大阪造幣寮の技術指導のため、わが国に招聘されたお雇い外国人である。ガウラントは自らの仕事の傍ら、日本各地の古墳の精緻な調査を行い、さらに帰国後も日本の古墳文化についての研究論文をまとめた。その内容は精緻かつ高度なものであり、日本における古墳の科学的研究の基礎を築いたものであることから、「日本考古学の父」ともいわれる<sup>(註10・11)</sup>。

ガウラントが、二室塚古墳をはじめとする高安古墳群を訪れた時期は不明であるが、明治30年（1897年）に発表された論文「日本のドルメンと埋葬墳」に、「双室ドルメン」が服部川にあるとの記述があり、また計測データも掲載されている。ガウラントは、ドルメンを4つのグループに分け、双室ドルメンは、第4グループとして、「二つのはっきり区別された室のある「ドルメン」とされ、二室塚古墳以外に、「黒山（豊前）に三つ、今市（出雲）のそばに二つ」とされている<sup>(註12)</sup>。

また、平成3年（1991年）に大英博物館で、ガウラントが撮影した二室塚古墳石室のガラス乾板写真が発見された<sup>(註13)</sup>。上田安範氏のご研究によると、この写真は、ガウラントの帰国直前の時期にあたる明治20年（1887年）から明治21年（1888年）に、米国人のロマイン・ヒッチコックとともに調査し、撮影されたものと考えられている。ガウラントに同行した、米国人のロマイン・ヒッチコックもまた、英語教師としてわが国に招聘されたお雇い外国人であったが、日本での米国人による日食観測隊の写真担当を務めるなど、写真技術のエキスパートであり、ガウラントの写真技術も彼による指導があったものと指摘されている<sup>(註14)</sup>。ロマイン・ヒッチコックの撮影した二室塚古墳の写真（巻頭2下）は明治24年（1891）に発表された論文<sup>(註15)</sup>に掲載されている。ガウラントとヒッチコックは、それぞれのカメラで石室の写真を撮影したものと考えられている<sup>(註16)</sup>。彼らの撮影した写真には、きわめて明晰に120年前頃の二室塚古墳の石室の姿が残されている。

また、明治21年には、地理学者でのちに東京地質学会を創立した山崎直方氏が、人類学者の坪井正五郎氏の依頼を受けて高安古墳群の調査を行っているが、二室塚古墳については、「東京人類学会雑誌」第4卷第33号に、二室塚古墳の石室の図を計測値とともに掲載し、「二室トナル」と記して社説している<sup>(註17)</sup>。

以上、記したように、二室塚古墳の石室は、ウイリアム・ガウラントが、日本の横穴式石室墳のなかでも、「双室ドルメン」として注目し、さらには、ロマイン・ヒッチコックとともに、写真撮影を行って、いち早く海外に紹介した石室として、また、日本における近代考古学の草創期の古墳研究に取上げられた古墳として、貴重な学史を有する<sup>(註18)</sup>。

- (註1) 大阪府教育委員会1966年「八尾市高安古墳群の調査－昭和41年度第1次都川其他地区調査概要－」「大阪府文化財調査概要1965・66年度」
- (註2) 高安古墳群と山麓の古墳保存・調査計画検討会議でご指導いただいている白石太一郎氏に、測量調査前の段階で、ご教示いただいた。測量の結果、ご教示いただいたとおり、墳丘の中心点が、前室と後室の間付近にある可能性が高いことが、確認された。
- (註3) 前掲註1
- (註4) 二室塚古墳・交互二室塚古墳については、本調査以前に、下記の西森忠幸氏の論文によって、石室略測図の作成等の基礎的な調査がなされ、その特異な構造についての考察が加えられている。  
・西森忠幸2003年「横穴式石室の増改築について一河内の二室交互塚古墳をめぐってー」『古代学研究』第162号  
・西森忠幸2004年「復室構造を有する横穴式石室塚についての一考察－大阪八尾市二室塚古墳と二室交互塚古墳－」『八尾史跡考古通信』創刊号 八尾市立歴史民俗資料館友の会史跡考古部会
- (註5) 柳沢一男2003年「複室構造横穴式石室の形成過程－狭道間仕切り型の築造系譜－」「新世紀の考古学－大坂初重先生喜寿記念論文集』大坂初重先生喜寿記念論文集刊行会
- (註6) 白石太一郎 1966年「畿内の後期大型群集墳に関する一試考－河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として－」『古代学研究』第42・43合併号
- (註7) 山崎信一2003年「横穴式石室構造の地域別比較研究一中・四国編一」「古代丸と横穴式石室の研究」
- (註8) 今回、本稿を草するにあたり、河内長野市教育委員会の太田宏明氏に、二室塚古墳の複室構造についての所見をいただいた。さらに、複室構造についてのこれまでの研究について、ご教示をいただいた。
- (註9) 重藤輝行1999年「北部九州における横穴式石室の展開」「九州における横穴式石室の導入と展開」(第2回九州前方後円墳研究会資料集) 第2回九州前方後円墳研究会実行委員会
- (註10) ヴィクター・ハリス後藤和哉責任編集 2003年「ガウランド 日本考古学の父」大英博物館・朝日新聞社
- (註11) 松江信一2002年「高安の「ドルメン」」「郵政考古紀要」31
- (註12) 上田宏範校注・監修 稲本忠雄訳1981年「日本古墳文化論－ゴーランド考古論集」
- (註13) 前掲註10
- (註14) 上田宏範2006年「R・ヒッチコックの澤日二か年とその業績」「I評伝 R・ヒッチコック－来日から帰国まで－」「ロマイン・ヒッチコック－澤日二か年の足跡」社団法人 檜原考古学協会
- (註15) ロマイン・ヒッチコック「日本の古墳」1891(合衆国ナショナル・ミュージアム報告書 1892)  
澤田義弘訳 上田宏範 監訳・校注「ロマイン・ヒッチコック－澤日二か年の足跡」社団法人 檜原考古学協会 2006年
- (註16) 前掲註14
- (註17) 山崎直方1888年「河内高安塚穴寶見記事第二」「東京人類学雑誌」第4卷第33号
- (註18) 二室塚古墳をはじめとする学史については、松江信一氏にご教示いただいた。W・ガウランドとロマイン・ヒッチコック、E・S・モースなどの高安古墳群の調査についての学史研究は、氏の下記の論考に詳しい。  
松江信一2006年「河内・高安古墳群から見たモース、ガウランドとR・ヒッチコック」「ロマイン・ヒッチコック－澤日二か年の足跡」社団法人 檜原考古学協会

# 報告書抄録

ふりがな	たかやすこんぐんふる・そくりょうちうとうこくしょ
書名	高安古墳群分布・測量調査報告書 一 大塚・山畑南地区詳細分布調査 市史跡・二室塚古墳測量等調査他
副書名	
巻次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	5 6
著者名	吉田野乃
編集機関	八尾市教育委員会
所在地	〒581-0003 大阪府八尾市木町1丁目1番1号 TEL 072-991-3881
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
たかやすこんぐん 高安古墳群	市町村 產筋番号	---	---	---			
八尾市大塚・山畑	27212	34 37 25	135 39	20061219~ 20070307	20000		重要道路確認
にしつづかこふん 二室塚古墳	八尾市服部川	27212	34 37 10	135 39 5	061016~061108		保存目的
所収道路名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
高安古墳群 大塚・山畑地区 (詳細分布調査)	古墳	占墳時代			須恵器片(表面採集)		既に確認されている ものを含め56基の古墳、 79地点の占墳状地點を 確認。
高安古墳群 二室塚古墳	石室	占墳時代			凝灰岩製石棺材片		二室塚古墳の墳丘範囲、 形状等が判明



大窪・山畠1号墳 墓丘 東から



大窪・山畠1号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠1号墳 奥壁(左が天)



大庭・山畠 2 号墳 開口部付近



大庭・山畠 2 号墳 玄室から開口方向



大庭・山畠 3 号墳 墓丘 南東から



大安・山畠 4号墳 墓丘 南から



大安・山畠 5号墳 墓丘 南から



大安・山畠 5号墳 開口部付近



大庭・山畠 5号墳 家形石棺 南から



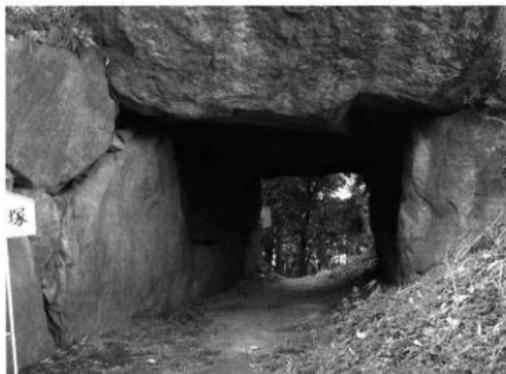
大庭・山畠 6号墳 墳丘 南から



大庭・山畠 6号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠 6号墳 奥壁



大窪・山畠 7号墳 開口部付近



大窪・山畠 7号墳 墓丘 北から

図版 6 高安古墳群 分布調査



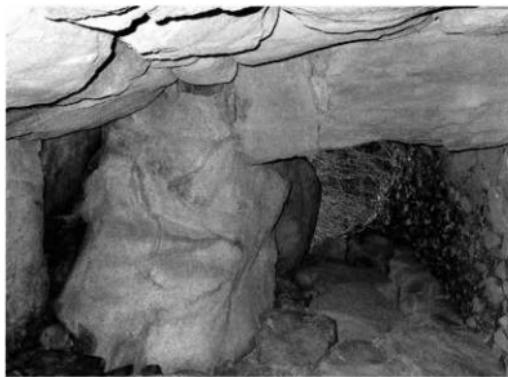
大窪・山畠 7号墳 遠望 東より



大窪・山畠 8号墳 開口部付近より



大窪・山畠 8号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠10号墳 玄室から開口方向(左が天)



大塚・山畠10号墳 開口部付近



大塚・山畠19号墳 墓丘 南西から



大塚・山畠19号墳 南西側(閉室石か)



大塚・山畠20号墳 墓丘 北西から



大塚・山畠21号墳 奥壁



大塚・山畠21号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠22号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠22号墳 奥壁



大塚・山畠23号墳 墳丘 南西から



大塚・山畠23号墳 開口部付近



大塚・山畠24号墳 墳丘南から



大塚・山畠25号墳 開口部



大塚・山畠25号墳 奥壁(左が天)



大塚・山畠25号墳 玄室から開口方向



大塚・山烟26号墳 開口部



大塚・山烟26号墳 奥壁



大塚・山烟27号墳 開口部



大塚・山畠27号墳 奥壁



大塚・山畠27号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠30号墳 墓丘 南から



大窪・山畠30号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠31号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠31号墳 奥壁



大塚・山畠32号墳 南から



大塚・山畠32号墳 奥壁(左が天)



大塚・山畠33号墳 墳丘 南から



大塚・山畠33号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠34号墳 左側壁残存部



大塚・山畠35号墳 左側壁残存部 西より



大塚・山畠36号墳 南西から



大塚・山畠36号墳 北東から



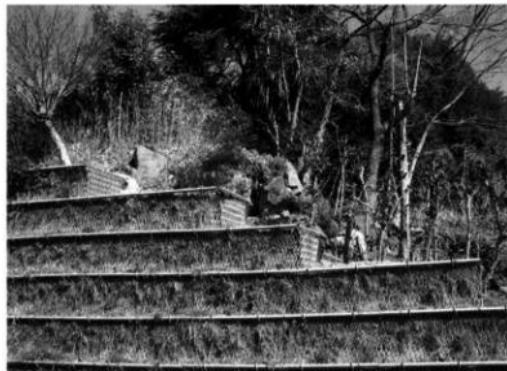
大塚・山畠37号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠37号墳 付近 南西から



大塚・山畠38号墳 左側壁残存部 西から



大塚・山畠39号墳 墓丘 西より



大窪・山畠39号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠39号墳 奥壁



大窪・山畠41号墳 墳丘 北西から





大窪・山畠43号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠44号墳 石室開口部付近



大窪・山畠44号墳 玄室から開口方向



大塚・山畠45号墳 墳丘 南から



大塚・山畠46号墳 南西から



大塚・山畠47号墳 墳丘南から



大塚・山畠49号墳 墳丘 南から



大塚・山畠50号墳 右側壁残存部 南から



大塚・山畠51号墳 墳丘 南西から



大塚・山畠51号墳 左側壁残存部 南西から



大塚・山畠52号墳 開口部(左が天)



大塚・山畠52号墳 奥壁(左が天)



大窪・山畠53号墳 玄室から開口方向



大窪・山畠54号墳 開口部 南から



大窪・山畠56号墳 左側壁残存部 西から



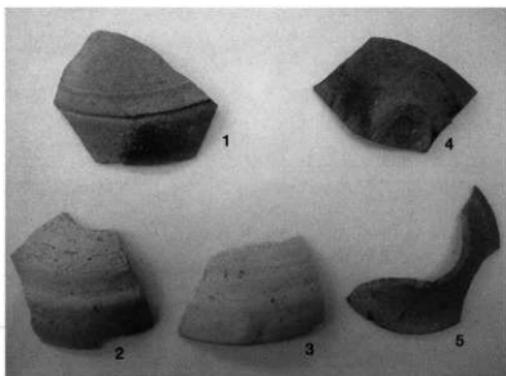
袖部から後室方向 (撮影 阿南辰秀氏)



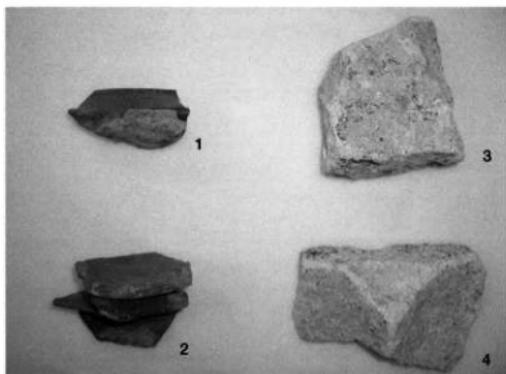
袖部のテラス状部分 前室側より (撮影 阿南辰秀氏)



表道右側壁付近 前室より (撮影 阿南辰秀氏)



大窟・山烟21号墳 表面採集遺物



服部川54号墳 表面採集遺物



二室塚古墳 表面採集石棺材

八尾市文化財報告 5 6 平成 18 年度国庫補助 高安古墳群等調査事業

**高安古墳群 分布・測量調査報告書**

一大塚・山畑南地区詳細分布調査 市史跡二室塚古墳測量等調査他一

発行年 2007年3月

発行 八尾市教育委員会

八尾市本町1丁目1番1号

編集 生涯学習部 文化財課

印刷 古賀印刷株式会社

